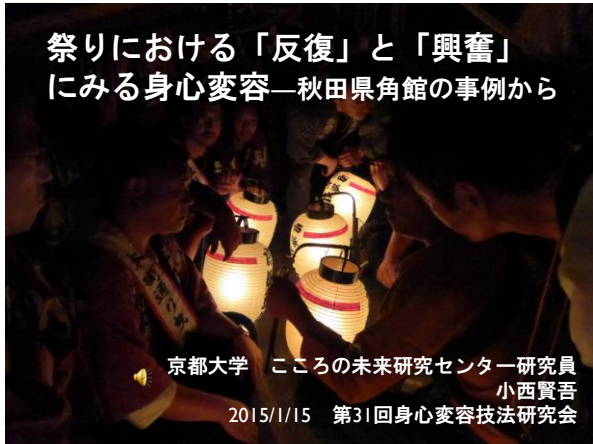


祭りにおける「反復」と「興奮」 にみる身心変容—秋田県角館の事例から



京都大学 こころの未来研究センター研究員
小西賢吾
2015/1/15 第31回身心変容技法研究会

問題の所在

- 人類学における古典的祭り分析モデル：
日常と、儀礼・祝祭の時空間を分節

「反構造」としての非日常/コミュニティや
シンボルが表すイデオロギーに従った主体形成
…といった特別な意味を儀礼はもっており、
それが日常の社会構造にフィードバックされる

⇒ 実際の祭りの場では何が起きているのか？
祭りの「秩序と興奮」の生成過程への関心

祭りの秩序と興奮

- 現場での身心変容：人びとは祭りにどのように
巻き込まれていくのか？
- 地縁・血縁から祭縁へ（都市祭礼研究）
→ 人びとを結びつけるものは？
- 反復の意義 cf: チベットのマントラ
- 祭りと暴動の境界：興奮を制御する？

角館（かくのだて）



秋田県仙北市
人口 28,601人(2014年)
秋田藩佐竹氏の統治
武家屋敷と桜
1970年代～ 観光地化
1997年 秋田新幹線開通



角館のお祭り



- 9月7日～9月9日
- 神明社／薬師堂／佐竹北家
- 寺社での儀礼とミコシ巡行／曳山
- 「日本一不親切な祭り」
「観光客にはわからない」
- 調査 2002年8月～2004年10月
(のべ10ヶ月)
- 2005・2010・2013年9月にも訪問

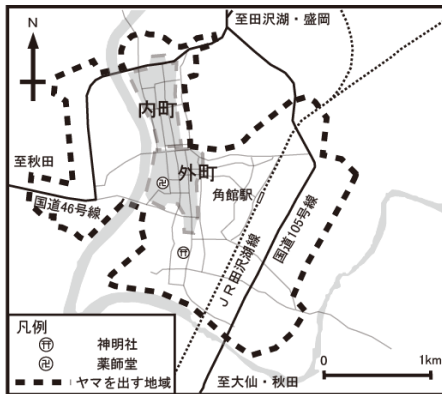


曳山（ヤマ）



- 18台（戦後に増加）。丁内／若者会によって運営
- 寺社への参拝、佐竹北家や各丁内へ披露（カドツケ）
- 「正責任者」を中心に、「交渉員」、「先導」など役割分担
- 町外からの参加者も増加

お祭りの舞台



交渉しながら進むヤマ

- 各ヤマごとの方針に基づく「曳き回し」
→ヤマ同士の「かけひき」の発生
- ヤマの行動には交渉が必要
「張番交渉」: 「入丁」の許可
「対ヤマ交渉」: 通行の優先権をめぐる
- 対ヤマ交渉決裂→ヤマブツツケ
「観光用」: 場所・時間を事前に決定
「本番」: 場所・時間とも確定せず

* 子供からおよそ50代までの男女が参加する(以前は男性42才まで)が、曳き回しの方針は責任者(30代半ば~)を中心とする男性が決定。ヤマブツツケには多くの女性も参加。

丁内と張番(ハリバン)



祭りと身心変容

- 言語的側面(祭りのリテラシー):
ルールや丁内区分、歴史等を知ることによって曳き回しの展開を理解し、感情を共有できるようになる
- 非言語的側面: 絶えず反復される囃子(止めると「死に山」とホイッスル、「オイサ」のかけ声
cf: 祭り後に虫の音が笛の音にきこえる
高校野球応援で「オイサ」
- 両側面が重なり合って「興奮」が生成しヤマブツツケに結実する(しないこともある)

囃子の種類

- 寄せばやし: 若者を集める時
- 上り山ばやし: 「目的」がある時
- 道中ばやし: 目的を達し丁内を「賑やかす」時
- 下がり藤・転回(方向転換)時
- 神楽ばやし(馬鹿ばやし): ヤマブツツケなど

その他踊り用の多くの囃子や、今はすたれたものなど。囃子独立での公演も多い

囃子方はもともと周辺の農村から。近年では高校の部活動など広範囲に組がある

2002年の祭りについての語り

- 「俺も高校さ行って、高校さいの時二時頃とかにメール来て、「あと〇と向き合ったから早く来い」とか言ってきた、え——っ!?とかって。なんだよ——、はええよ!とかって。もうやることは決定してあったから。七日の日に、とりあえず入丁のこともめて、帰ってくるときにその通り、葬儀屋のところで、△が〇の後ろにびたつとついでだからもめて喧嘩なって。〇が前さ出して△も前さ出して、途中で〇が入丁した入丁したとかって言って、無到来だってことで、張番が出てきて、張番との交渉になって、まず行けみたいな感じで、その日は終わって」
 - 「九日に〇は田町を抜けて稲穂の十字路左さ曲がって栄丁さ入ってきて、おらほも(立町)十字路右さ曲がって向き合う形になって。学校終わったのは三時半だから、その時は置き山からちょっと進んだくれえかなあって感じで、〇はパチンコ屋の前。夜なって、だんだん距離詰めてって、パチンコ屋の前ではじまって、後ろさずっと七日町ついてらって、七日町の後ろに西勝楽がいて、七日町は当初転回して西勝楽とやるんでねえかって話なってらったとともこまでもついてこれたで」
- (男性、1984年生まれ)

2004年のお祭りにもみる興奮の生成と制御

—Aヤマの事例を中心に—

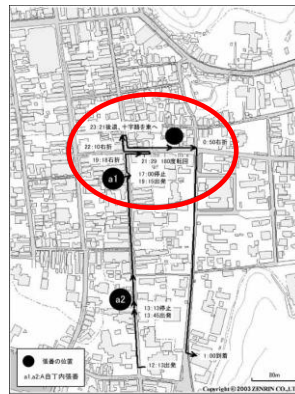
Aヤマ: 旧市街地中心部(内町)のa1,a2の2つの丁内が合同で出すヤマ

祭りに向けた高揚

- 8月上旬から準備開始: 若者による共同作業、宴会
- 曳き回しの方針をめぐる議論の噴出
- 隣接するB丁内との境界争いに端を発する「因縁」

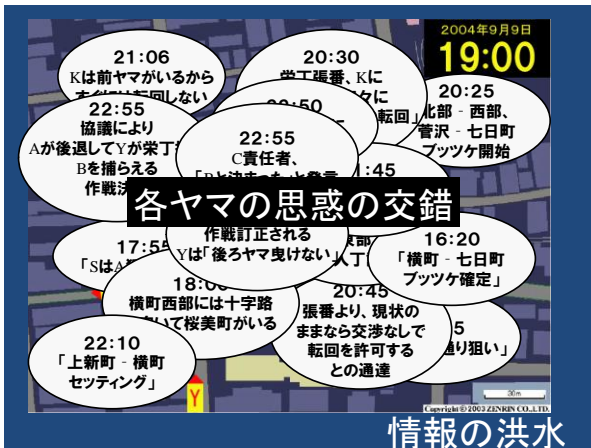
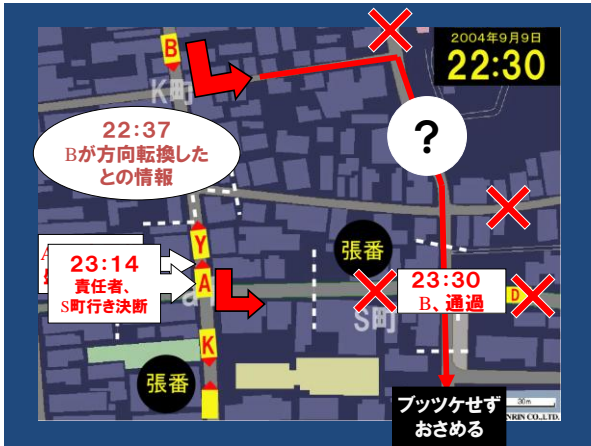


曳き回しと「かけひき」の実際



- 9月7日、Bが「約束違反」→Aヤマは3日間にわたりBヤマとの本番ブツツケを念頭においた行動をする
- 9月9日19時以降のAヤマの行動をみる





祭りのあと

- なぜA・Yの目論見は「失敗」したのか
 「端的に言えば、あのまま行けば激突になる。それを想像して嫌だった。心中としてはこれ。前には威勢のいいヤマがいて、その後ろにはAが控えている。進路として真っ直ぐを想定するのはやめた、ということ。」
 (Bヤマの正責任者)
- A・Yヤマの方針の相違
 「Aの目的が強かったので、Dと交差してくれるということになった。KRとやるという話もあったが、K町張番としてはしっかりやる準備ができてそのつもりなら入丁を許すという話だった。だけどKRはその気がなかった。個人的にはDとは乗り気でなかったが、若い衆のこと考えてやる、ということ。俺も若い衆ならそう思っていた」
 (Yヤマの副責任者)
- AYAMA正責任者の葛藤
 「汗流させられなくて申し訳ない」(9月10日未明、若者に向かって)
 「3年間は長かった。十分だと思う人はいないかもしれないけれど」(インタビューより)

興奮を制御する①

「あぶれない」をめぐる

- 「因縁」がなくてもヤマブツケは成立 (1994-2004年で、本番ヤマブツケをしなかったヤマは1年当たり平均1.18台)
- 「恋人を探しにいくようなもの」

多様な参加者を惹きつけなく要素としてヤマブツケは不可欠
 ↓
 「ブツケだけが祭りではない」
 コアメンバーの価値観

「お祭り」三日間のAヤマについて人数の推移

興奮を制御する②

—祭りが祭りであるために

- 「責任者は失敗するもの」
 日常における議論(無尽、ネットなど)
 反省から祭りの「本来有るべき姿」を常に検討
- 祭りを破綻させる要素への警戒
 暴力沙汰と警察の介入
 ムトーライ(無到来)をめぐる
 神事としての側面: 参拝が最優先
- A・Bは、2013年の祭りについて丁内境界をめぐる争い〜本番という流れに終止符

社会関係の基盤としての祭り

- 非日常空間は、日常から完全に分離されているわけではない
— 日常のつきあいが、祭りの成否にも直結
- 「お祭り馬鹿」になる = 祭りのゲームへの参入
⇨ 地域社会空間への参入 : 祭りに帰郷する人びとも含めて形成される共同性
- 濃密な人間関係の長所と短所
お祭り以外の社会関係も必要とされる

まとめ

- 角館の祭りでは、複雑な規則体系(言語的側面)と音楽、かけ声の反復(非言語的側面)双方に参与することによって、参加者の身心が変容していく
- 観光客にわからない祭り ⇨ 祭りを楽しみ、責任を背負う人びとが「かぐだての人」になる
- (垂直軸、水平軸ふくめ)
葛藤を抱えることが、社会関係と祭りの価値、興奮を常に更新し再生産することにつながる